

漢字の読み書きから中国語のデジタル・リテラシーへ

——T・S・マラニー『チャイニーズ・タイプライター——漢字と技術の近代史』から考える——

温秋穎

一 はじめに

メディア論の名著とされるW・J・オングの『声のメディアと文字のメディア』には、「たった一つのアルファベット」という議論がある。オングは、「他のどんなスクリプトにもまして、音としての音を直接ひろい

中国語を実際に耳で聞く機会がさほどなく、母語話者ではない人たちにとつて、中国語を理解するには、漢字という読み書きのシステムに頼ることが多い。中国語の筆記体系・書体系 (writing system) は漢字からしかなくないためである。

あげ、音を直接、空間的な等価物に還元している」(「アルファベットに対して、表意文字」「絵文字」である漢字は「もの」を表示するが、ことばを表示するわけではない、と論じていた。オングの論に従うならば、漢字そのものを含め、漢字で書かれた中国語の文章は「真の意味での書かれたもの」ではないことになる(二)。

総数何万もある中国語の漢字は西洋の学習者だけでなく、学者と技術者に焦燥感をあおる。一九世紀の印欧諸語の比較研究から二〇世紀の社会科学の内外まで中国語が近代化の情報技術に不適合であるという審判はたびたび下されており、同じく「漢字圏」に属される日本語と韓国語の「正書法」も創造性を押さえつけるものとされた。

はたして中国語の漢字は、タイプライターをはじめとする近代の技術に適應することができないのか、それとも、この断罪そのものが技術の西洋中心主義の見方なのか。トーマス・S・マラーニーの『チャイニーズ・タイプライター』（比護通訳、中央公論新社、二〇二一年）は、近代の言語的な権力布置を脱構築し、技術言語学 (technolinguistic) の視点から中国語タイプライターのグローバル・ヒストリーを描こうとした。

およそ二〇カ国にわたって中国語タイプライターの実物と文書資料を掘り出し、オーラルヒストリーも駆使した本書は、実は中国語⇨漢字の情報化をテーマとする二冊の著作のうちの一冊目である。タイプライターに限らず、印刷や電信、図書館の目録、辞書配列などの中国語の情報インフラの全般に目を配る著者はこれから、複製・分類・解説・転送を集約するコンピュター時代における中国語の入力問題にも挑むのだろう。その前奏としての本書にも、技術の社会構築、社会の技術的構築、漢字に対する認識といった多岐なテ

ーマが含まれている。

本書が出版された後、言語学やメディア論、技術史の研究領域でさまざまな注目を集め^③、中国語タイプライターを初めて網羅的に考察する史学研究としての新規性はアメリカ歴史学会のフェアバンク賞の受賞によっても確認された。本稿では、これまでの学界の評価と書評論文の成果を前提としようえて、『チャイニーズ・タイプライター』のさらなる発展の可能性に関して以下の問題点を提起することを試みたい。

まず、メディア論の視座から考える。本書は、中国語の漢字を近代の情報技術に適用させるための技術上の設計を中心に考察したが、そもそも、タイプライターは何のために使われていたか、さらに、タイプライターに搭載する中国語と、電信やインターネットに搭載する中国語とが、いかなる形で異なっているか、というようなメディアとしてのタイプライターへの理解をさらに掘り下げられる可能性がある。

第二に、言葉の応用と意味論の角度から考える。本

書が多用する「技術言語学 (technolinguistic)」という重要な概念には、若干未整理な部分が残されているように思える。タイプライターを始めとする中国語をエンコード (encode) する近代の情報技術は、漢字を伝達するために作られたものか、それとも中国語を伝達するため作られたのか、という問題点を整理しつつ、技術言語学の境界とその発展の可能性を提起してみたい。

二 メディア論のなかのタイプライター

―人間と機械と言葉

タイプライターの力により、手書きのスク립トは整然とした文書となつて、手書きで要求された「正書法」はタイプライターの「清書法」に取り替えられる。ことばが固定化した空間を作り出すという意味では、タイプライターは印刷術と共通している。しかしながら、国語を創出し、速読・黙読を可能にしたとされる

印刷術と比べると、タイプライターがメディア論で受けた注目はまだ多いとは言えない。

例えば、書き言葉が人間の思考に及ぼす影響を論じるオングは「書くことも印刷もコンピューターもすべて、ことばを技術化する *technologize the word* ための方法である。いったんことばが技術されると、その技術の助けを借りるほかなくなる」^(四)と言った。哲学者のプラトンは書くことを批判していたが、プラトンによるこのような分析的な批判もまた、書くことが心的過程に作動してはじめて可能になったという。オングの議論では、書くこと・印刷・コンピューターという並びの中に、タイプライターを入れていない。しかし、人間の歴史で用いてきた一連の記録装置ないし「備忘具」のなかで、タイプライターという技術を比較論的に考察することもできるだろう。

「ことばを技術化する *technologize the word*」という議論と隣接するものではあるが、キットラーは文書を保存するメカニズムとしてのタイプライターを、オン

グが焦点をあてた話しことばではなく、人間の存在を表す手書きという行為と比較した。キットラーは、「タイプライターは、手が、ということとはつまり言葉が本質的に存在する領域から書字を引き離してしま」い、「人間から手の本質的なあり方という意義を奪い去る」というハイデガーの講演を引用しつつ^⑤、人間のありかたと技術・機械との関係性を問うている。例えば、印刷機との比較では、タイプライターは小規模の印刷機に近く、使用者が自分で自由に換えられる文書形成システムであるという。またキットラーは、手書きの書字にある連続性が、タイプライターのブロック文字によって断絶されることに注目し、さらにこのブロック文字の標準配置図に潜む計算可能性をコンピュータ時代の議論に接続させた。この意味で、コンピュータの歴史と入力時代のテーマに見据えたマラニーの展望は、『グラモフォン・フィルム・タイプライター』でのキットラーの着眼点と共通すると言える。

しかしながら、漢字の情報技術が「文書の記憶装置」としてのタイプライターからコンピュータの入力装置まで発展する過程においては、情報の「記憶」から情報の「伝達」「計算」へという長い道のりを歩まなければならないし^⑥、そのなかで効率・能率を改善するためのタイプライターの応用の問題が現れる。タイプライターの効用を能率の観点から考える論説としては、梅棹忠夫が一九六〇年代初頭に発表した「事務革命」に関する文章が代表的である^⑦。梅棹は、タイプライターを第二次事務革命と見なしているが、和文タイプライター（漢字を含むタイプライター）は日本において第二次事務革命を引き起こすことはなかったと論じた。それは、数千字の漢字を抱える「日本語の文字組織の宿命」によるという^⑧。

すなわち、和文タイプライターは漢字を搭載するという技術の問題を解決したが、日本企業が急速に拡張するなかで、機械と人間との相互関係という意味においては、実用面で効率が悪く事務革命に不都合だと梅

棹が説いたのである。そこで、梅棹は仮名のタイプライターの使用を主張した。しかしながら、このようなタイプライターの使用において漢字を排除すべきだという議論は、一九八〇年代以降のワープロ専用機の普及とそれに搭載された漢字変換技術の実践によつて部分的に解消された。さらに、ワープロ専用機の普及はパソコンの普及に先行して、日本における電子設備での入力・編集作業のデジタル・リテラシーを整えるものでもあった^(九)。

以上、メディア論のなかでタイプライターが論じられたいくつかの主題を概観してきた。ここから、「ことばを技術化する」ものとしてのタイプライターが、人間の話しことばや人間の書ききといった営みに起こした変動に注目し、それをワープロ・電信・印刷術などのメディアと比較して検討する可能性を見て取ることができる。この意味で、『チャイニーズ・タイプライター』で取り上げられた一八四〇年代の電信の到来から一九五〇年代のコンピューターの到来までの時間帯に

において、タイプライターが同時代の情報技術と比べていかなる代表性と特殊性を有していたか、という問題を意識しなければならない。例えば、電信を使つて効率よく中国語を伝達するためには、簡素な文や略称などを採用するのが一般的であろうが、清書と記録のために使うタイプライターの場合、中国語文章の字数に対しても要求がそれほど厳しくはないと予想される。

本書では、林語堂のタイプライターが「漢字を機械の内部に隠した」^(一〇)、また一九五〇年代の中国人タイピストが作った活字盤が「予測変換的」で「記憶補助の側面もある」^(一一)というように、タイプライターとコンピューターの技術上の連続性を意識するような叙述を行ったが、はたしてこの技術の移行はスムーズであつたのだろうか。漢字情報の記憶装置から中国語情報の計算装置への発展過程における「人間と機械、言語の間の関係性を密かに転換させた新しい技術言語学的条件」^(一二)への解説を三冊目の著作に期待したい。

三 「技術言語学 (technolinguistic)」と「試みと使われてきた言葉」

本書は、中国語の漢字の筆記体系 (writing system) を電信やタイプライターにエンコードするための技術上の難問を解くことを試みるために、言語改革者の思想や言語政策の実施を重点とした中国語国語運動史、言語改革史とは別のものとして、「技術言語学 (technolinguistic)」という独自の研究視点を打ち立てようとした。

この概念を説明するために、本書は芸術家の徐冰が四千字の「偽漢字」を創造した『天書』という作品を重要な手がりとしてしている。『天書』で表現された「偽漢字」は、一見すると漢字に酷似しているにもかかわらず、よく見ると漢字そのものではなく、読み書き能力のある中国語の母語話者にとって完全に不可解なものである。中国語の漢字体系、さらに膨大な漢字に依拠した中国の知識の伝統に向けられた懐疑的な視線が

この作品には込められているが、それについてはここでは省略したい。本書で問題とされたのは、なぜ『天書』が見る側になお漢字的なものであるという奇妙な感覚を与えることができたかということである。

「音、義、形の三要素は漢字の全てを説明することはできない」、「目に見えず、聞くこともできず、意味とも関わらない、さらなる次元が残されている。本書では、これらをまとめて「技術言語学」(technolinguistic)と呼ぶことにする」(二三)とあるように、『天書』のような筆記体系が言葉そのものを擬似する上でのメタ的な側面、近代の情報技術の場合でいえば、言葉を技術にエンコードするときの不可視の部分を著者が掘り出そうとしたと言える。

このような漢字の技術上での不可視な側面は、「中国語のパズル化」とも呼ばれており、「常用 (common usage)」、「合成 (combinatorialism)」、「代用 (surrogacy)」という三つのアプローチで措定されている。常用のアプローチは、膨大な漢字から常用漢字を統計学的な方

法で抽出して、タイプライター上に漢字の使用頻度ごとに配列する。合成のアプローチは、漢字を部首などのモジュールに分割して、また組み合わせることで多種多様な漢字を作成する。さらに、漢字の電信伝送と林語堂の「明快」タイプライターからは、「代用」という共通のアプローチを著者は見出した。代用のアプローチは、数字・ローマ字などの多重仲介を使い、媒介をさらに媒介する。その効果として、タイプライターの場合は、漢字そのものを「直接タイプするためではなく、どの文字をタイプしたいかを機械に教えてやる」(四)ことになる。

以上のように、著者が描き出す技術言語学の領域では、言語の専門家と文字改革の提唱者よりは、中国語の筆記体系というパズルと苦闘する技術者が主役として登場する。これは、同時期の新文学運動による白話文の普及や国語国字改革の運動が、中国語の言語的近代化の問題の解決を実はいつそう困難にしていたと彼が考えたからである(五)。

一方、本書でやや疎かにされているのは、漢字の技術言語学の領域と中国語そのものの使用状況とに一線を画することは難しいという点である(六)。タイプライター・電信・印刷術などのコミュニケーションの技術は、第一に意味の伝達を目的とする。中国語の筆記体系は疑いなく漢字からしか構成されていないが、徐冰の作品『天書』が本物の漢字ではないことと同じように、漢字をランダムに並べるだけでは、中国語という言葉はなお成り立たない。漢字を近代的な技術に適応化することのさらに上位にある技術的問題点は、中国語という言葉をいかに効率的に伝達するかということである。

本書は第七章において、コンピュータ時代の入力問題に接続させながら、語彙使用の頻度に応じて文字を再配列する毛沢東時代のタイピストが行った「予測変換」の方法を提起した。しかし、慣用語彙というような言葉の使用習慣、さらに、使用習慣のなかに積み重ねられた生活経験は、毛時代に限らず、中国人の言

語生活に本来内在するものである。近代以来、中国語の筆記体系と文体をめぐってさまざまな改革案が提起され、漢字を廃止・制約する議論が交わされ、中国語の使用が公・私、教育・文芸といった各領域で激変していた。これを背景にして、中国語タイプライターの発明者が種々の選択肢から、いかなる書記体系と文体を選定し、またいかなる言語の環境でのこのコミュニケーション・技術の応用を想定したのか、というように問わなければならない。この問題設定も、本書が言うところの技術の社会的構築、社会の技術的構築に関わる重要な課題であろう。このように、著者が着目したような「漢字」のタイプライターとしての側面だけでなく、もっと「中国語」のタイプライターとしての側面にも目を向けていくべきではないだろうか。

これを踏まえれば、技術言語学のさらなる発展の一つの可能性は、国語国字運動史、文字改革史の研究領域と隣接する方向にあると考えられる。例えば、本書で取り上げられた一九二〇年前後に大量生産に失敗し

た注音符号のタイプライターの事例について、当時は注音符号と漢字がそれぞれ初等教育や事務などの異なる場面で使用されていたことに注目することで、注音符号のタイプライターの応用を困難にした要素を探ることができる。また、一九三〇年代に漢字に取って代わるアルファベット式の中国語表示法であるラテン化新文字が広がっていたなかで、QWERTY式のタイプライターが中国で利用された範囲や、一九三〇年代と一九五〇年代に漢字簡化の方案が中国語タイプライターにもたらした技術上の変容を精査することによって、ことばと技術が影響し合う二〇世紀における中国語の技術言語学の全体図を浮上させることができるだろう。

四 おわりに

漢字を搭載する近代の情報技術の出現は、漢字が近代に不適合だという議論を部分的に解消するだろうが、

次のコンピュータ時代に迫ってくる問いは、漢字が「生きるべきか死ぬべきか」ではなく、漢字がどのような中国語の中で生きているかということになるだろう。コミュニケーションの技術はそのことばの使用環境に大きく依存する一方で、コミュニケーションの技術も人々の言語生活を変えられるのではないか。

本書で紹介された一つの興味深い記事を取り上げた。一八八九年、シェフィールドが発明した中国語タイプライターに注目する『チャイニーズ・タイムズ』紙は、この機械の効用について、「驚くべき速さで、漢字や声調について学び、疑いを解くだろう。『……』アルファベットのブロックで遊ぶ子供のような初学者が、同時に中国の友人と連絡を取ったり、本の組版をしたりできるかもしれない」と予測している²⁷。このように、漢字の読み書き能力を十分に獲得していない中国語の非母語話者が、中国語タイプライターの補助のもとで、自由自在に中国語を運用する未来図が描かれていた。

中国語のタイプライターによる使用者の記憶力や読み書き能力の補強が、一九世紀に実践されることがあったのかどうかはともかく、このような発想は既に見られたのである。今日では、入力における予測変換や自動的な文法修正の技術が、中国語に限らず言葉の書き込みに確かな利便性と快適性を与えている。例えば、入力する頻度の高い語彙と定型句がデータベースに記憶されており、次の入力のとときに使用頻度の順番に沿ってユーザーに提示される。しかし、この利便性の他方で、一語ずつ言葉を連ねていく発話や、文を作るときに自然な連想と思考は、語彙の常用範囲の提示と文法の修正によつて時々中断され、制限されかねない。さらに、絵文字の使用、言葉に関する人工知能や機械翻訳の正確度の上昇、文章を読み上げる機能の開発など、コミュニケーションの技術が読み書きを利便化する側面はいくらでも挙げられる。このような技術が読み書き能力と入力方法を改善する積極的な側面を意識した上で、コンピュータ時代を取り扱う次の研究の

課題は、技術を使う人々がいかに自己の言葉を意識し、言葉を運用するののかという意味での〈デジタル・リテラシー〉の在り方であり、情報化社会における言葉と技術が相互に影響し合う関係性であろう^(二八)。

最後に、『チャイニーズ・タイプライター』がこのたび日本語に翻訳された意義に触れておきたい。一九三〇年代に中国大陆に侵出した日本製タイプライターに注目した本書の第五章「漢字圏の支配」が提示したように、漢字は中国語という言葉に限定されず、日本語のなかでも長らく使われてきた文字である。このようなグローバルな言語技術史の視点は、日本の読者にとっても共感できるものだろう。日中両国における漢字文化の交流は、すでに思想史の視点や語彙と文体での相互影響の側面から論じられてきた。一方、文字の近代化に対処する経験や漢字そのものに対する認識における両国の相違点と類似点については、これまでの日本の漢字論や漢字文化論において多くは取り上げられておらず^(二九)、これからの研究の留意点になるだろう。

例えば、中国の文字改革の動向が日本の国語国字問題に影響した一事例として、戦後、ラテン化新文字による中国語表記法に共感をもつ中国語学者の倉石武四郎をはじめ、日本語の表音文字化が国語審議会で積極的に主張されたことが挙げられる^(三〇)。このほか、一九七七年頃、中国と日本の漢字の略字とを統一させる「日中漢字の略字共通化」の議論が行われたことは、あまり知られていない^(三一)。また、一九七〇年代に繁体字を使う台湾では中国語コンピュータの技術が進んでいたが、これらの漢字を入力する技術の開発、導入において日本といかなる関係があったかといったことも、東アジア地域を往来する漢字の言語技術史に貢献できる視点であるだろう。

① W・J・オンク著 桜井直文・林正広・糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』藤原書店、二〇一〇年、一九〇頁。

② 「真の意味で書かれたもの」という意味でのスク립トは、たんなる絵たんなる物事の表示からなるのではなく、ある「発話」の表示であり、それが語っていることは、あるいは、語っていると想定されることは、あるいは、語っていると想定されることはの表示なのである」(W・J・オン

グ前掲、一七七頁。

③ 本書を取り上げた書評として、Ke Li, Angela, "Book review: *The Chinese Typewriter: A History*," *Chinese Journal of Communication*, vol. 11, no. 3, 2018, pp. 359-363; Linda S. Matthews, "Book review: *The Chinese Typewriter: A History*," *Global Media and Communication*, vol. 16 (1), 2020, pp. 123-125. 比護道「書評」情報技術のグローバル・ヒストリー「Thomas S. Mullaney: *The Chinese Typewriter: A History*」『京都メディア史研究年報』第六号、二〇二〇年、二〇六―二二五頁など
が挙げられる。

④ W・J・オング前掲、一七〇頁。

⑤ フリードリヒ・キットラー著、石光泰夫・石光輝子訳『グラモフォン・フィルム・タイプライター』筑摩書房、一九九九年、三〇七―三〇八頁。

⑥ キットラーは、メディアにとっては必要にしてかつ十分である機能として「記憶」「伝達」「計算」を挙げており、タイプライターの「文書の記憶装置」というメディアの性格を強調した（フリードリヒ・キットラー前掲）。

⑦ 『中央公論』一九六〇年第一〇号に連載された「日本探検」第五回の「事務革命」、一九六一年に講談社の「現代の話」と文章のシリーズ第五巻『事務の効果的な文章の書き方』に掲載された「文書革命の現実と将来」が挙げられる。

⑧ 梅棹忠夫「事務革命」『日本語と事務革命』講談社、二〇一五年、三二頁。

⑨ 長谷川一「日本語ワープロ」の銀河系―「書くこと」の電子化と「編むこと」のデザイン』『マス・コミュニケーション研究』第六八号、二〇〇六年、五四―七八頁を参照。

⑩ トーマス・S・マラーニー著、比護道訳『チャイニーズ・タイプライ

ター』中央公論新社、二〇二二年、二六七頁。

(一) トーマス・S・マラーニー前掲、三〇七頁。

(二) トーマス・S・マラーニー前掲、三二〇頁。

(三) トーマス・S・マラーニー前掲、三四頁。

(四) トーマス・S・マラーニー前掲、二六七頁。

(五) トーマス・S・マラーニー前掲、三六―三七頁。

(六) 言語の専門家と文字改革者による中国語タイプライターの技術への影響について、トーマス・S・ウェードが一八五九年に開発した到北京官話のローマ字表記法にしたがって、アルファベット順で漢字をタイプライターに並べることが可能にされたことや、一九二〇年代に「常用漢字」語彙をめぐる議論が中国語タイプライターの語彙的境界の確定の一助になった、といった事例が本書で挙げられたが、これらの部分が議論の中心とはされなかった。

(七) トーマス・S・マラーニー前掲、一三八―一三九頁。

(八) 例えば、コンピュータにおける中国語の技術化の問題について Tsu Jung, *Kingdom of Characters: The Language Revolution That Made China Modern*, New York: Riverhead Books, 2022. について研究は注目すべきであろう。また、インターネットが言葉に与える影響について、グレッチェン・マカロック著、千葉敏生訳「インターネットは言葉をどう変えたか」フィルムアート社、二〇二二などの研究が挙げられる。

(九) 日本語の漢字と中国語の漢字とは必ずしも同じものではないが、近代以降、両国は、漢字の制約・廃止をめぐる問題点において、かなり共通した主張が見られる。例えば、漢字の完全なる保存を唱える人は、漢字にある文化的な意味や民族の共同体に於ける不可欠な文字にある精神性を強調したが、漢字を制限・廃止することを支持する人の多くは、漢字の近代技術への不適合や、教育面での効率の低さなどを意識して発言してい

た。安田敏朗『漢字廃止の思想史』平凡社、二〇一六年、藤井（宮西）久美子『近現代中国における言語政策―文字改革を中心に』三元社、二〇〇三年などを参照。

（二〇）阿辻哲次『戦後日本漢学史』筑摩書房、二〇二〇年、安田敏朗『国語審議会―迷走の60年』講談社、二〇〇七年を参照。

（二一）「日中漢字の略字共通化」〈合同検討委作ろう〉議連訪中団提案
中国も乗り気 お互いに専門家派遣『朝日新聞』一九七七年九月一八日
朝刊、一頁、「今日の問題 同文同種？」『朝日新聞』一九七七年一〇月一日夕刊、一頁などを参照。